

体験 発見 制作

しよう

しよう

しよう

みんなの  
ワークショップ

素材との出会い展

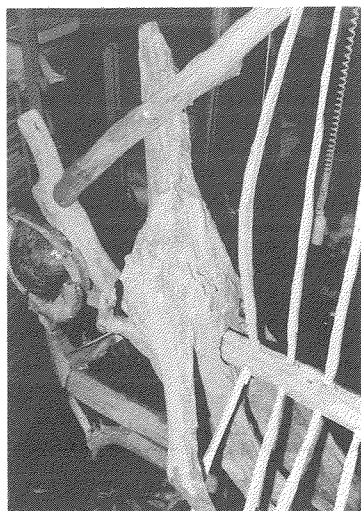
# 木と造形

No.3

1990.3.17—4.8

こどもの城  
造形スタジオ





春休みプログラム  
素材との出会い展 〈木と造形〉 No. 3  
1990.3.17-4.8

はじめに

今年は、木と造形の3回目です。造形素材としての木は、強さ、やわらかさ、あたたかさ、軽さなど、どれひとつとっても人間に親しみやすく、長い間有用であったことは、法隆寺の柱の耐久力を指摘している人の話でもわかります。祖先の知恵は、木をいとおしみ、大切に利用してきたのです。現在私たちは、自然と共生することを知っていた祖先の教訓を生かすことのできないほど、環境を悪くしています。自然を考えた第1回展。木と自然と道具を考えた第2回展。過去2回とも私たちは、木を介して自然を考え、直接造形素材という考えを本格的に提示しませんでした。そして本年は木と造形の最終回なので、二年間の経験を基盤に、木を造形素材として正面に出してワークショップをする予定でした。しかし、ここ数年の、みじかい歳月のうちでも、私たちの自然に対する態度を目撃して、私たちは、自然と共生していくための一つの手だてとして木をもう一度検討すべきであると考えようになりました。〈一本の樺〉(14頁参照)の事件もその遠因になっています。

枯葉や人間の身勝手に切りはらわれる小枝などを、造形素材として活用するには基本的にはどんな発想が必要か、それが要求されたのが今回のワークショップです。一本の木であっても、その全体を構成している部分部分の固有の表情を生かして、私たちはワークショップを構成し、プログラムをたててみました。

ギャラリーの入口には、九十九里浜の海岸から採取してきた流木が〈木の魚〉として甦っています。波にうちよせられ漂着している流木のかすかな息づかいを大切に取り出して、それに再び生命をふきこんだのが〈木の魚〉です。今回の私たちのワークショップは、〈木の魚〉に象徴されています。そして無数の葉っぱや小枝がどのように生かされているか、プログラムを体験していただければ、私たちの企画趣旨がご理解いただけるでしょう。3回を通じて〈木と造形〉にご協力していただいた下記の方々に厚く御礼申し上げます。

1990年3月 こどもの城 造形事業部

発行 こどもの城 1990年3月17日  
編集 造形事業部 (Tel 03-797-5662)  
住所 〒150 東京都渋谷区神宮前5-53-1  
印刷 (有)博英社 (Tel 03-253-4010)

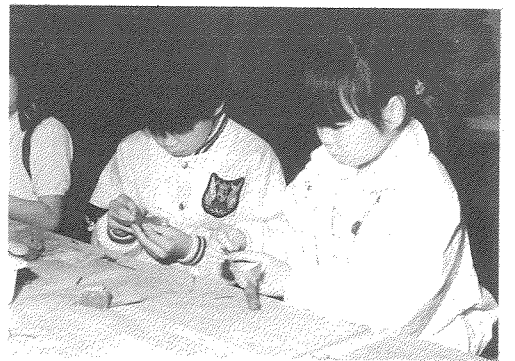
四国製紙株式会社 藤川八郎 (和歌山市こども科学館)  
竹中大工道具館 山田ダンボール株式会社  
東京都神代植物園 渡邊茂 (東京都木材団体連合会長)

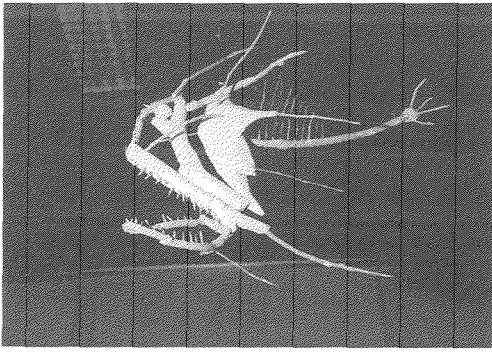
## ワークショップ

素材との出会い展「木と造形」は、第1回の1988年から1990年の今回にいたる3回の春休みに木を素材にして作ったり、木からイメージして描いたり、子どもたちが木と出会い、つき合い、遊び、木の造形体験をするワークショップである。自然木を体験させる（第1回）、木に変化を加える体験をさせる（第2回）、身近な“自然木”を造形素材として使い、いろいろな造形的な木の楽しみ方を体験させる（第3回）という3部から成り立っている。

樹木は土から芽を出し根を上げ、少しずつ成長し、種類によって多少異なるとは言え、広葉樹であれば、四季折々に葉に変化を見せ、針葉樹であれば、そのあり方に微妙に周りの環境の変化を感じさせる要因を運んでくる。日常生活の中で忘れがちなそのような〈木〉の様相を、熱中して作る行為から、呼び覚まさせてあげたい。芯や皮があり、年輪があり葉があり、硬いものがあれば、少し柔らかいものもある。それは、作る体験をとおして、実感できる。本当に木の性質を知ることは、制作することと深い関係がある。

素材との出会い展「木と造形」No.3（1990年）では東京都という大都会の真ん中で、やむなく切られることになった〈一本の樹〉樺の木のもっとも微弱そうで、しかし、木であることを主張させている、葉っぱと柴ともよばれる細い小枝と皮のほんの一部を通じて、より多くの子どもたちに「大切な木」を知らせたいとの意図のもとに、ワークショップをすすめることにした。木の樹齢はおよそ200年でその木からは、街路樹とは異なった、生命を維持してきた意地さえ感じる。子どもが葉をつかってフロッタージュをし、それを感じることは不可能だろう。しかし、「木を大切にする」心とその思いを子どもたちに葉と遊ぶ中で伝え、単なる耳や目を通してのものではなく、体そのものでかかわった体験を仕掛けてみた。「木と造形」として、子どもたちに提示する環境とプログラムは、楽しく物をつくるのが、実はいろいろなものとの関係から成り立ち、単に素材としてのかかわりをもつことにとどまらない。一枚の紙が何本の木によってできているかが問われる現在、紙を節約して使うことと同じくらいに、子どもたちに木とよい付き合い方ができるようにする義務が私たち大人にあるように思えてならない。造形スタジオという硬質なビルの空間の中に素材として持ち込まれた木が生きるためには、より多くの子どもたち一人一人が何らかのかかわり方で木と出会い、手触りを通して、手の体験を通して遊ぶことが今必要である。そこから自然に対する思いが生まれてくるように願わずにはいられない。





## ギャラリーワークショップ

場所：1Fアトリウムギャラリー

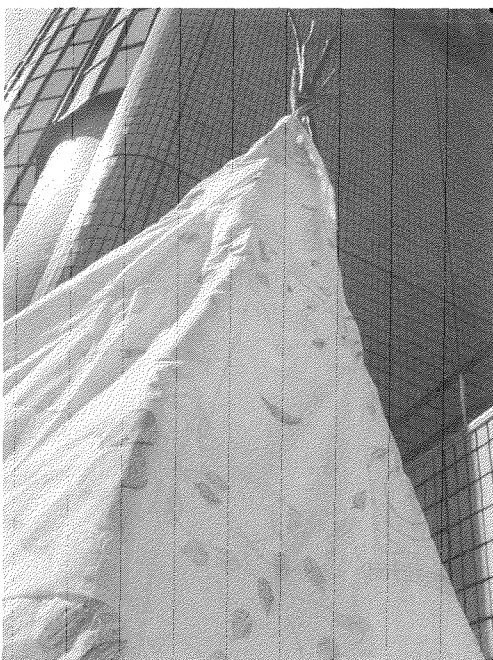
対象：幼児・小学生低学年（年齢の高い子どもの参加も可能）

素材との出会い展「木と造形」の第2回目から、ギャラリーワークショップをはじめた。昨年は、ギャラリーの中の3カ所のコーナーで、子どもたちがそれぞれの物を作り、それらをまとめて1冊の木の本になるように環境を設定した。今回は木と魚という関連のないものをあえて結びつけ、「魚の住む木」をテーマにした。それは「魚の住む木は、きっとこんなものだろう」という想像を働かせるものである。造形スタジオのワークショップは、見たり、聞いたり、触ったり、考えたり、臭いをかいだり、いろいろな体験の上に活動が成り立っている。木の体験とは単なる素材体験にとどまらず、幼い子どもたちが想像の中で木と遊び、様々なかかわり合いをする。子どもたちが、どこから木とかかわるかを試行錯誤し楽しい雰囲気の中で造形遊びができることを想定して環境を設定した。展示・体験・制作というコンセプトによる、造形意欲を喚起させるような環境の中で、子どもたちの出会うものは、直接目にみえ、手で触れられるものだけに限らない。果てしなく、心の中に想像の世界を拡げるものであってほしい。

### 〈I. 展示〉

子どもたちは、まず、ギャラリーの入口に吊り下げられた3.5メートル×3.70センチの大きな魚のオブジェに驚かされる。数本の流木が組み合わせられて作られたその魚は、化石に近い風貌で、子どもたちを出迎えてくれる。階段を登ると、左手の所に、葉や枝で作られた魚のイメージがビデオでコマ撮りされて、流されている。葉っぱが魚になり、枝が海草になって、木目の海を泳ぎまわる。見たこともないような魚たちの泳ぎっぷりは、すばやくもあり、たどたどしくもある。子どもたちは素材そのものが動くことによって、その中に個性を見る。次第に楽しい魚の世界に引き込まれてしまう。葉っぱのさかなが泳ぐ画面の横には、樺の皮で染めた布のテントが2つ置かれている。淡い茶色のテントには、樺の葉っぱをフロッタージュした色とりどりの絵が描かれている。そのテントは子どもが5人位入れる大きさである。テントを越えて次には、魚の住む木の妖精が、樺の枝でつくられた笛を吹いて、やさしい音をたてている。

2Fのギャラリーの一面の壁には、経木と紙で作った10センチ×15センチの木のカードが光を浴びて様々な形を主張している。その隣のもう一面の壁には、木の粘土と枝や葉を組み合わせで作った、小さな森の生き物たちが、その世界を見せてくれる。また、樺の小さなかけらを彩色して作った木のチップの集合体は、風に揺れて、小



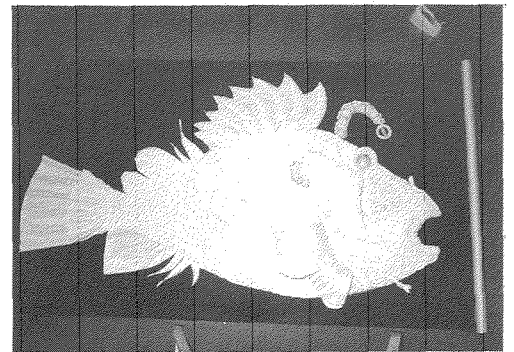
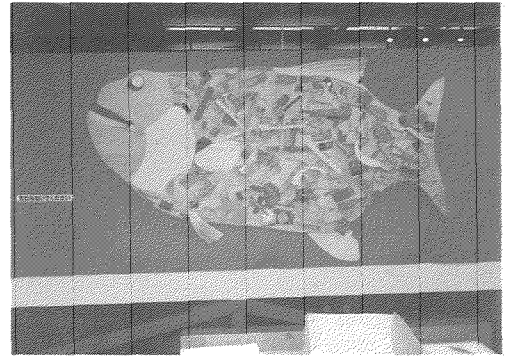
さくとも一つ一つが異なる形であることに、有機的な木の温もりを感じさせる。ギャラリーの一番奥のところに、葉っぱの版画が展示されている。このようなギャラリーワークショップの環境は、子どもが知らず知らずのうちに展示物を楽しんで見ることができるようになっている。

## 〈II. 体験〉

展示は、子どもの木に対する体験をより楽しく、また多種多様にするために子どもたちの動作を誘発させたり、ごっこ遊び的な要素をいれている。子どもたちは、テントの中から樺の釣竿で糸をたれ樺の皮の染め布で作られた小さな魚の釣堀を楽しむ。そのテントの周りには、木製の動物積み木が置かれ、釣りの合間に、子どもたちは動物たちと戯れる。テントから少しはなれると、円弧を描いているギャラリーの壁のあちこちには、50種類以上の様々な形に切り取られたベニヤ板の魚たちが泳いでいる。マグネットがついたその魚たちは、子どもたちの手で、泳がされ、別の壁の海に移される。シルエットだけにされている魚たちは、時おり、裏がえされ名前を確認されて、子どもたちの楽しい名前あてクイズの相手となる。子どもたちが作ったものや遊びの対象となる木をもとにした造形物に囲まれた環境の中で、子どもたちは時には親しげに、時には目を見はり、いろいろな反応をしながら、それらとかがわっている。ギャラリーの中のどれを手にとってみても、すでに手に木の感触が伝わっているのである。

## 〈III. 制作〉

ギャラリー展が始まる前に作られた、たくさんの子どもの作品が、訪れる子どもたちをなごやかに迎え、それによって、子どもたちは、制作することに、少しのためらいもない。B6の紙に大きく魚の形を、線がきする。壁にあるたくさんのベニヤ板の魚の形に自然と目がいき、それを真似たり、あるいは、そんなものに見向きもせず、一筆がきで、形をきめてしまう子どもがいたり、それぞれに思い思いの魚の形が出来上がる。次に、板にしきつめた樺の葉っぱに紙を乗せフロッタージュ（こすりだし）をする。色とりどりの葉っぱが浮き上がり、魚は波とも模様ともとれる背景にはいつていく。次に葉っぱのスタンプが魚のフォルムの内側に鱗のように押され、幻想的な葉っぱの魚が出来上がる。水性ペンによる線がき、油性ペンによる葉っぱの形、スタンプインクによる葉っぱの鱗の組み合わせが奇妙なコントラストを生み、魚と葉という奇妙な関係から、予測のつかない効果を紙の上に表していく。子どもたちは、フロッタージュの感触とスタンプの反復の面白さから、〈木に住む魚〉をより興味深いものに描いていく。



## ギャラリーワークショップと「一本の樺から」のプログラム

### プログラム1 はっぱのフロッタージュ（こすりだし）

樺の葉っぱがついた台の上に紙をのせ、クーピーペンでこする。茶色の葉が浮き上がってきたかと思ったら、大きな角がつき、6本の足がつく。かぶと虫ができあがる。フロッタージュは、ペンの角度やこすり方の強さによって葉の形が鮮明にでたり、でにくかったりする。小さい子どもの中でも直感的に1回で葉っぱのこすりだしに成功する子どももいる。最初は強くぬりすぎて葉の形が表れてこない子どもたちも、2回、3回と回を重ねるうちにこつを体得する。そのような体験を通して、子どもたちは、こすりだしたいろいろな色の葉っぱを鳥や蝶々や魚たちに変身させていく。

### プログラム2 木のカード

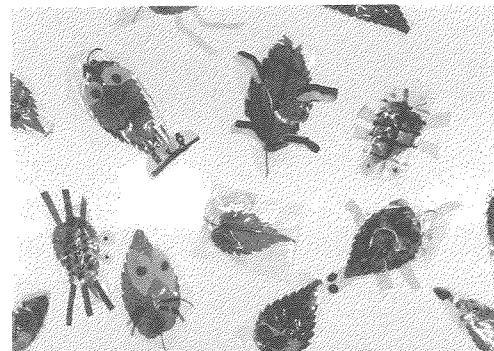
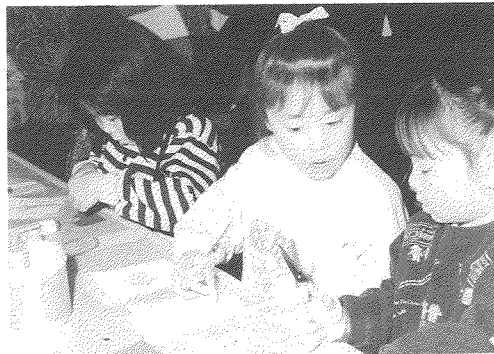
はがき大の一枚の紙に鉛筆で木の形を描き、切り取る。切り取った木をはがき大の経木に貼る。木の形を切り取った残りの紙をもう一枚のはがき大の経木に貼る。陰と陽の関係で、2本の木ができた。その木に色がみを葉っぱの形に切って貼る。二枚の木のカードに後ろから光をあてると、光を通す経木と色によって光の通し方がことなる紙、その葉っぱと幹の調和がすすがしく、想像の木立を目の当たりにしているような気分になる。自然の木がそうであるように、たくさんの子どもたちが作った木の形は様々で、見る者をころからなごませてくれる。

### プログラム3 はっぱむしのペンダント

透明のセロファンに色ソフトペンで模様を描く。一枚の樺の葉っぱを、そのセロファンで包み、接着テープでとめる。枝から取り払われた時次第にもろく弱々しくなりはじめていった葉っぱは、彩色されたセロファンに包まれて、落ち着き場所を得たように生まれかわる。そこに手でちぎられた白い薄紙の眼や足などが糊で貼られる。樺の葉っぱの小ささは、おさない子どもの手にやさしく調和し、その中で、居心地よさそうに包まれていく。すこし窮屈に包まれても透明な紙のおかげで、葉っぱは外界とまったく隔てられきってしまいはしない。紐がつけられ、子どもたちの胸にぶら下げられると、一枚の葉っぱはあっという間に、子どもの個性の一部になる。

### プログラム4 葉っぱの版画 1年生～

10センチ×10センチのケント紙に葉っぱを葉の裏側を表にして接着剤で貼る。それからクーピーペンや油性分のあるクレヨンや鉛筆

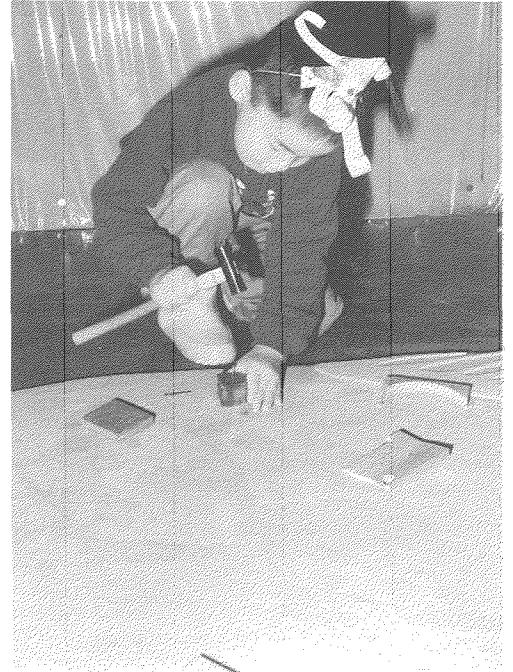


で葉っぱを生かした絵を描き加える。版ができたら、ローラーで水性の絵具をつけ、その上に経木をのせてバレンでこする。葉っぱの版画ができあがる。葉っぱを亀の甲羅にしたり、うさぎの耳にしたり、帽子のつばにしたり、子どもたちが葉っぱを思いもかけない物に転化していることに驚かされる。葉っぱの版画が経木に転写されたとき、経木のもつ独特な表情が、よりいっそう、子どもひとりひとりが生み出した葉っぱの主張を強調させている。

#### プログラム5 トンテンカン魚 1年生～

子どもたちは、大きなさかなのうろこづくりにはげんでいる。

1メートル×1.5メートルの大きなさかなの形の板材に、いろいろな形の木端のうろこをつけていく。木端にやすりをかけ、茶か緑系の水性の木用塗料を塗る。さっと、布で絵具をふきとり、木目がのこるくらい薄く色づけられた木のうろこを“トンテンカン”とかなづちで打ち込む。重いかなづちでくぎをトントンと打つのが楽しくて、うろこは2個3個と同じ子どもの手でつけられていく。様々な形、微妙な色どりのうろこの組み合わせが、オシャレなさかなを作り出していく。



#### プログラム6 小枝とねんどでつくろう 2年生～

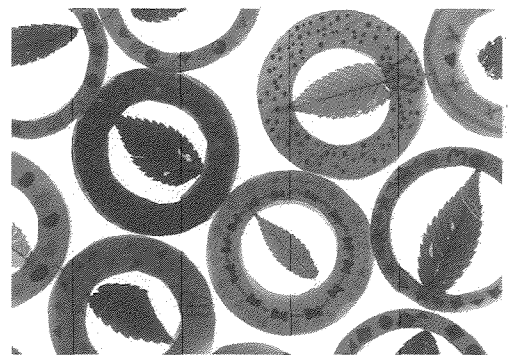
小さな森に住むたくさんの動物たち。樺の小枝と葉っぱを使って子どもたちは森の住人をつくっていく。小枝や葉っぱは木のねんどとほどよい調和を見せる。手の中にすっぽり入りこんでしまう大きさに作られた生き物は、小さな木立風に設定された森に置かれ、生きはじめ。それは、また、作り終えて直ぐに手にのせたときでも小宇宙を連想させてしまう程に、それ自体に触覚的な自然の息吹を残したまま新しいものに生まれ変わっている。通常どのプログラムにおいても、大人がつくったサンプルは子どもにあこがれをもって見られ、受け取られる。しかし、この小枝と粘土の生き物に関しては、子どもが作った物の方が生き生きと、木立を駆け、葉の上で休み、楽しく暮らしているように見えてならない。



#### プログラム7 はっぱのワッペン 3年生～

10センチの直径、1センチの幅のドーナツ型にケント紙2枚を切り、それぞれに透明セロファンを貼る。一方の真ん中に、樺の葉っぱを置き、残りのドーナツ型を貼り合わせる。輪の中に葉っぱが浮いて見える。その紙のドーナツ型に○△□のスタンプや水性ペンで模様をつけると、はっぱのワッペンはできあがる。

葉っぱは木の枝から落ちて、少しづつ色を変え、もろくなり、葉

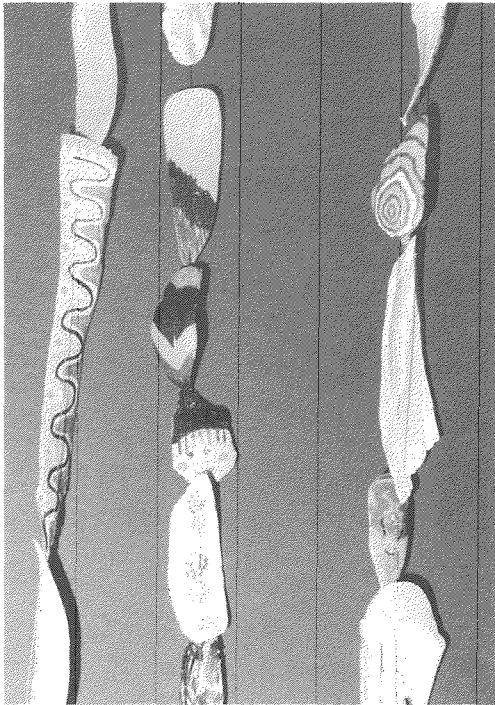




の形をこわしていく。一枚の葉っぱを長くその生まれた形にとどめておくためには、押し葉にしておく。新聞紙にはさみ、数日間ぶ厚い本をのせておくと、葉脈もくっきりと鮮明になり、色も落ちた時のままとどまっている。その葉っぱもはさまれたままでは、その心地よい姿が見えないので、透明セロファンにはさむ。材質感をセロファンで包んでしまうが、中にある葉っぱの姿から、枝についていた頃の葉っぱの余韻を感じさせてくれる。周りの丸い額縁は色と形もさまざまに飾られ、時には、葉っぱの主役を横取りしそうになる。しかし、自然の葉は、そのコントラストにさえ、持続的な強さをしめす。つまり、葉っぱは周りの光が朝の光から昼そして夜に変わろうとも、葉自体の存在感は常に変わらないのである。それは、はっぱのワッペンが子どもたちの身の周りに長く置かれた時、あかされるであろう。

#### プログラム8 小さな櫛のかけらでつくろう 3年生～

櫛の枝に丸のみを打ち込み、ひとかけらの櫛をほりだす。その形は世界で一つである。不定形のかけらは、木の性質を表すとともに木の暖かさを感じさせる。かけらを紙やすりで丁寧なみにがく。やすりをかけ終わった時の手触りがなんともいえない。木の繊維のまばらな感じからすべすべになってゆくのを、ほんの小さなかけらから子どもたちは体験できるのである。ていねいにみがく子どもほど、次にはていねいに小さな面に模様を描いていく。油性のペンで装飾した後、木工用ボンドに少し水を加え、刷毛で全面を塗る。塗りたての時は、白く不透明のものが乾くと透明になると共につやも生まれてくる。さらに、かけらのもろさを保護する役目も果たす。通常は捨てられてしまいそうな、小さなかけらに暖かい生命を吹き込むのは、一生懸命にやすりをかける子どもたちの根気と、彩色する丁寧さによる。そうしてみると、私たちは、ほかにも何かたいせつなものを捨ててしまっているのかもしれない。「何かにいかせないかな」という工夫の気持ちは、想像と創造の始まりであり、そう考え始めると、生かされるべきものが、案外、身の回りに潜んでいるのかもしれない。





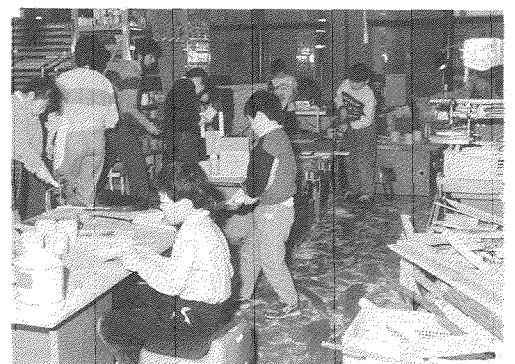
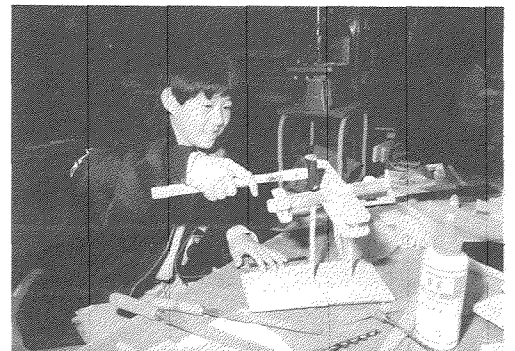
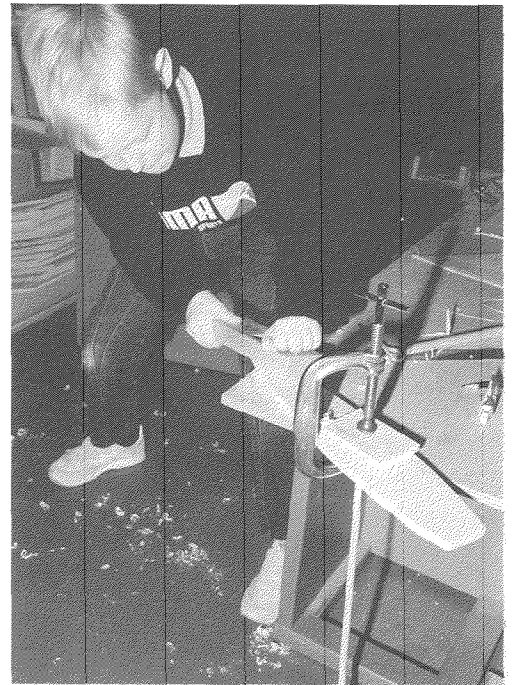
## スタジオワークショップ

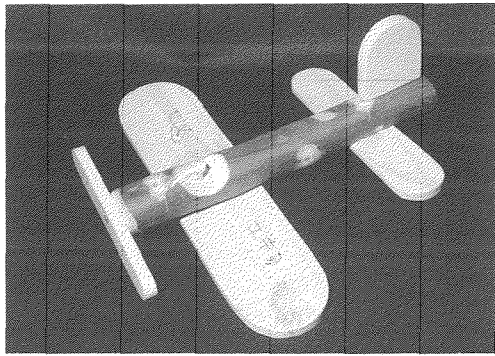
場所：3F造形スタジオ

対象：小学生以上

造形スタジオでは、昨年に引き続き、小学生以上の子どもたちが自分の力で、作りたいものを時間をかけてつくっていくワークショップを実施する。制作をする時間は子ども一人一人によってことなる。予測はつかない。一人の指導員に5～6人の子どもがグループになり、制作する。共同制作ではない。参加する時間がそれぞれに異なるので、指導員の配慮は並大抵のものではない。しかし、お互いに見知らぬ同志であるが、同じ制作の場をともにしていることによって、そこにいる一人ひとりが相互に活気を与えあっている。子どもたちが、指導員のサンプルに魅せられて参加する気持ちを強くもったとしても、他の子どもたちの姿がみあたらなければ、決意がゆるぐこともある。それくらい、子どもたちは、子どもたちが何かをやっている場に、引き寄せられる。造形スタジオのワークショップ活動は、子どもたちのために考えた環境設定の中に子どもたちが参加し、制作を通して、指導員と子どもがかかわり合いをもち、つきあい、制作過程を共に模索することによって成り立つものである。制作におけるこのようなかかわり合いは、様々な素材や技法の中でおこなわれることができる。しかし、子どもが積極的に変化させることによって、子どもたち自身に目に見えた変化と手ごたえをあたえてくれるのが、素材としての木であるように思える。木そのものが既に立体であり、それに働きかけるためには、意欲と覚悟と本当に自分が「何を」ではなく、「この木でつくりたい」と思う意志をはっきりと自分で感じる事が、制作の前提となる。その意志の確認のために展示・体験・制作というコンセプトがワークショップの基になっているともいえるのである。造形スタジオが今までにも、展示をし、原初的な体験を促すきっかけ作りのプログラムを準備しさらに、手を動かして作っていく制作のプログラムを提示しているのは、子どもたちに何をどんなふうに分てつくりたいかを、子どもの中で明確にすることが目的である。作り始めてしまった時、子どもたちの中ではあることが体験され、すでに次のステップにうつっている。造形物に対する積極的な行動のはじまりは、見ることであり、知ることであり、触ることであり、考えることであり、どれも、子どもの自主的な、ものへのアプローチとして考えられる。

なぜ、子どもたちは作りたいと思うのだろうか？ 造形スタジオの「木でつくりよう」に参加する子どもたちにとって、木の制作は、ノルマでも義務でもなく、ある評価を受けるためのものでもない。子ども自身の意志で作るか作らないかを決定したものである。制作に

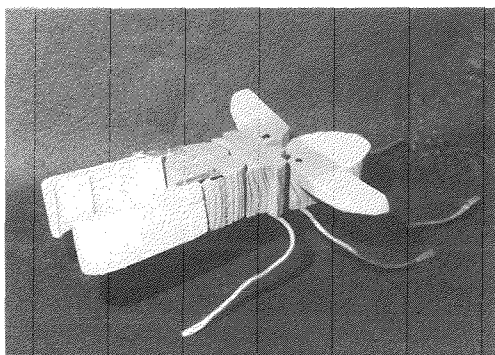
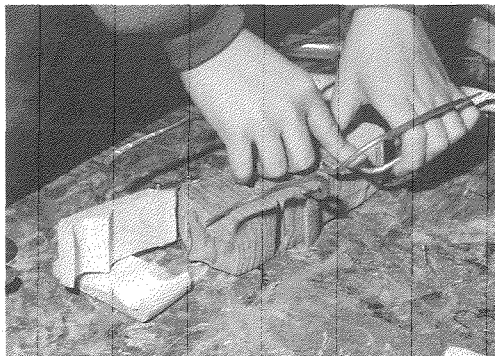
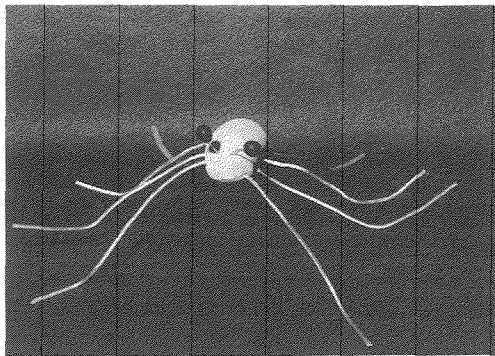




のぞむ姿は様々であるが、子どもたちは自由に作っていいとなると何を作っていいものか、戸惑いを見せることが少なくない。何を作りたいかを決定した後の子どもたちの様子もまた様々である。指導員が子どもたち5～6人を担当しているのも、その千差万別な子どもと少しでも多く語り、子どもたちのやりたいこととやれることを現実化する手助けとなるよう、時には相談相手になり、時には技術的な方法の例を示したりする。しかし、あくまでも子どもたちが自分のできることを自分で知り制作することが、木の体験の目的の一つである。

#### 〈I. 展示〉

指導員が子どもたちのために示しているサンプルは、子どもたちが興味をもちそうなもの、木の特性を生かしたものの、木でつくる場合の接合部分のパターンを含んだもの、指導員自身がこころよいと感じる木の制作物など、いろいろある。去年は虫や船の展示物を多く準備した。展示物の中を指さして、そのものを作りたいと言った子どもは、1パーセントに満たないものであった。それは、予測に反したものである。素材を削り、その変化していく様をみながら、カッコイイと言って抽象的なものをつくった子ども一人がいた。その他は、全て具体的な物をつくった。具体的な物の中でも、ごぼうをつくった一年生の男の子などは、稀な例である。その他に子どもが作ったものは、日用品（実際に使えるもの——本箱、椅子、タオルかけ）、ゲーム類（パズル、スマートボード、ブーメラン）、遊ぶ物（車、飛行機、船、動物、昆虫、ロボット、人形、花、家）などである。その中でもっとも多く作られたものは船であった。去年の経験から言えることは、制作にきっかけを与えるために準備した展示物が、子どもに直接影響を与えるのは、子ども自身が迷っている時であり、直接、具体的なところを参考にする時には、子どもの中で漠然と船が作りたかったり、なんとなくカッコイイと思って作るなどである。展示物がどのような形の物であれ、子どもたちが作りたいと思い、作る物への思いの深さによって、展示物をどのように使い、展示物にどのように影響されるかは、子ども一人一人の環境や意識によってくる。展示物に似たものを作ろうとした時、子どもは似た形が作れたことに満足する。決して、より展示物に近づけようとはしない。展示物に対する子どもの評価は、一様に「すごいな、あんなの作りたい」というように、単純ではあるが、きっかけとしての役目は充分にはたしている。子どもたちは作ったものを見てもらいたいという欲求をもっていることがある。しかし、3時間、4時間をかけて作ったものは大事にもってかえろうとする。だれに見てもらいたいのだろうか。多分、家族の人や友人なのだろう。そして自



分も時おり、見るためだろう。しかし、それがいつまで続くかは、子どもたちの回りの環境によってことなるだろう。大切なことは、作る過程で体験したことであり、制作物はその証にすぎない。

## <II. 体験>

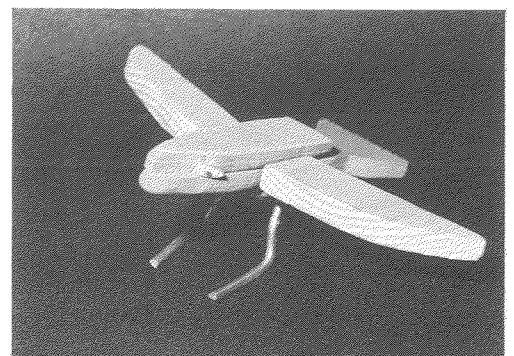
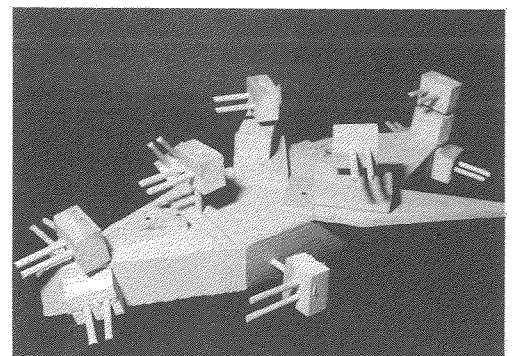
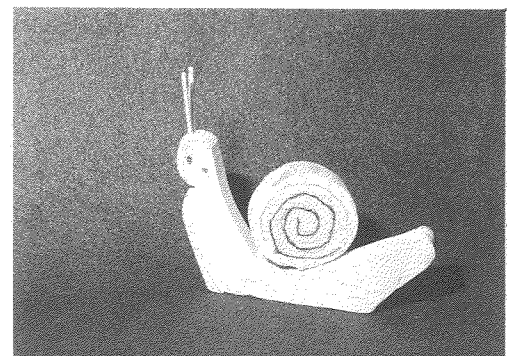
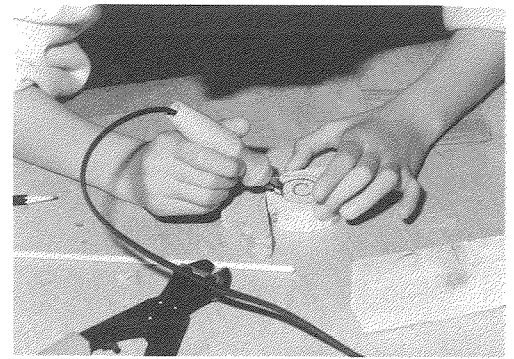
造形で実施するプログラムに、「これどのくらいの時間がかかるんですか」と子どもをつれてきている大人が聞くことがおおい。子どもによって、それは一様ではない。しかし、テーマと作り方をはっきりと提示しているプログラムの場合は、こどもたちの作り始めた時間と終わりの時間から、大体の平均時間を割り出して答えることができる。しかし、作りたいものを自分で決めて、作りかたも工夫をしながら、木という素材に対していく「木でつくろう」では平均時間を割り出すのは不可能にちかい。子どもたちに時間の制約を越えて、子どもたち自身が納得のいく物を制作してもらうためにスタジオワークショップを実施しているのである。

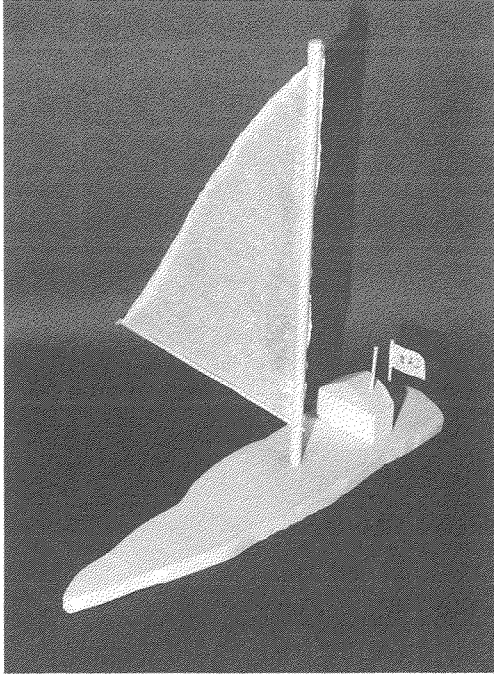
参加する子どもたちに、時間がかかること、自分の力で最後までやり通すことなどの注意を最初に与えると、まず、親の都合で時間がないために断念する子どもが多くみうけられる。子どもはやりたい表情のまま、残念そうにあきらめる。木で何かを作るためには、3、4時間かかる。親たちは、制作することに何時間もかかることに驚く。遊びにはきているのだが、子どもが作りたいと思っても、それに3時間はさけない。それは何を意味するのだろうか。まだ、確かな答えを得てはいない。しかし、今年も、造形スタジオでは、時間のかかる「木でつくろう」を実施する。子どもたちにとって、よい体験だと信じているし、昨年の経験から、その実感をもっているからである。

最初、子どもたちは場所にも慣れていないため、少しの不安を見せながら造形スタジオの入口の所で名前をかく。学年も明記する。5、6年生になると、少々の照れを見せながら、名前と学年を書いていく。1年や2年生の子どもは、これから、親の手を離れて、子どもだけのスペースで、やるぞという意志を、もう一度確認する。子どもたちは制作に入る前に、目に見えない貴重な体験をする。親たちを説得しても、尚かつ作りたいのか。それともしかたがないとあきらめるのか。親子関係、家族関係によって、さまざまなプロセスを経て、「木につくろう」に参加する。作った後の子どもたちの充実した顔を一度でも見たなら、時間の壁は必ず越えられると思わずにはいられない。

## <III. 制作>

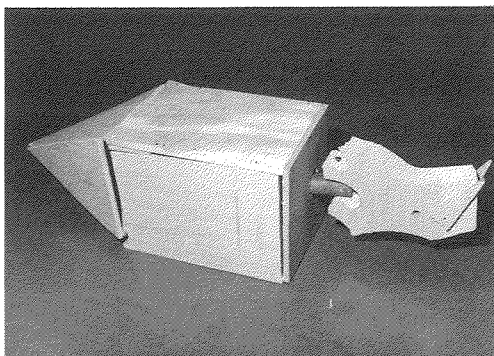
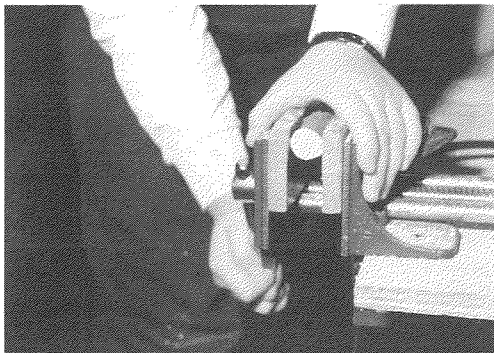
時間の問題を解決して参加した子どもたちは、担当の指導員に説明を受ける。その時はまだ、場になれていないこともあって、笑顔





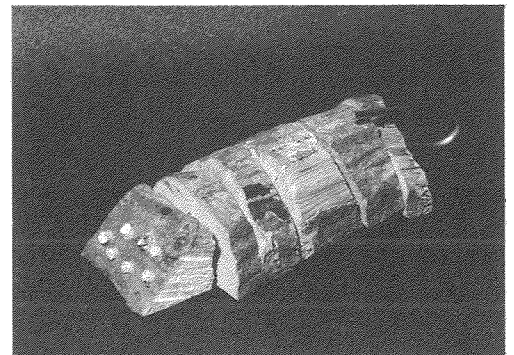
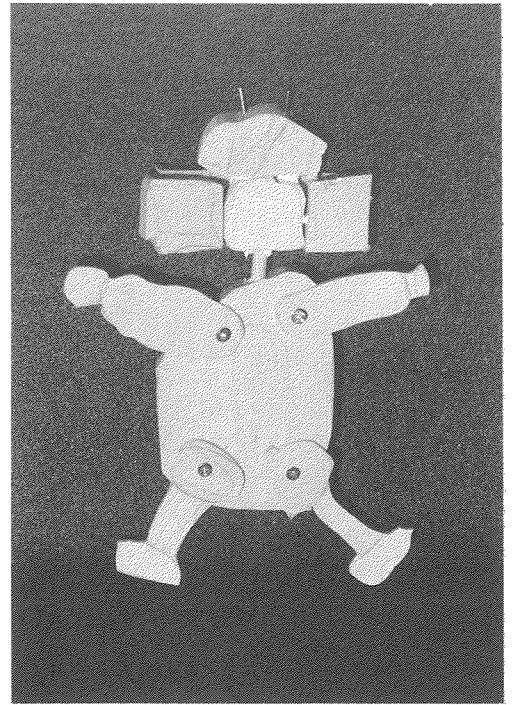
を見せる余裕などない。しかし、作りたい物のスケッチを書き始めると、やる事が具体化してくるので、問題がはっきりし、指導員に助言を求めたり、言葉のやりとりもふえてくる。知らない子ども同志が同じグループで表だって交流をしたり、話し合うことはめったにないが、ともに道具を共有し、横で作っているだけで、子ども自身は、制作する雰囲気を感じ、一度に様々な状況を把握し、判断する。つまり、材料、道具、制作するための努力などである。それは、ある意味で、とても大きな導入と意欲をかきたてる環境である。

同じグループの子どもが同じ物をつくることはないといってよい。かえって、知り合いの子ども同志が同じグループになった時同じ物を作っている場面をよく見受ける。最近の子どもの生活環境からみて、一人で見知らぬ場に入って何かに参加することは、あまりない。親とともにいるか、あるいは顔見知りの友達と共であったりする。子どもの意志の決定場面が少ないともいえる。例えば、物質的にほしいものは、選択肢があらかじめ決められているが、「木でつくろう」の場合、何をつくるかの決定を自分でしなければならない。それは、実際に手を動かすこと以前のものであるが、制作の大きなポイントである。何をつくるかを決める時、年齢が高くなると自分のできることも含めて決定する。小さい子どもはとにかく作りたいものを描く。材料を選ぶことも自らの意志できなければならない。制作するとは、計画性も含めて、本来さまざまな要素が一緒になって子ども自身の造形能力や欲求を高め、深め、満たすことである。その本来の制作する行為を子どもたちが体験することが目的であり、本当は楽しいことだと実感してもらいたいのだ。時おり本当に作りたくないけれど、参加している子どもを見受ける。その子は本当にかわいそうである。親に対する助言を試みても、親が子供の気持ちを無視して、子どもを造形スタジオにほおりこむ。そんな時、指導員は、子どもとの話の中で、つくれそうなものを限定して伝え、子どもが重荷になっている要素を、少し減らしてあげることはできない。それによって、子どもが気を取りなおし、本来の制作の楽しさを見つけることもある。その時は、幸運である。「今日は作りたくない」という気持ちを親に伝えられない子どもを参加させようとする大人たち自身に、10cmの丸太を切ってもらうプログラムを準備する必要があるのではないかと、私たちは今思いはじめている。一本の木を切る行為は、大変だけれども、楽しい。その楽しさは、子どもたちが自らにその冒険心をためそうとする時なのである。日常の環境と決して無縁ではない。



## <制作 素材としての木>

木は切ったり、やすりをかけたり、みがいたり、割ったり、削ったり、彫ったり、焼いたりして、加工でき、そのために適切な道具がある。加工の仕方でも、木の色々な様子が表れる。切った後のざらざらした感じ、それをみがくとすべすべする。木の部分によって色が違ったり、細い枝でも硬かったり。繊維が縦に通っていて、割るとカーンといさぎよく割れたり。その様々な木の性質も湿度や温度によって微妙に異なる。子どもたちにとって、そのような木の性質は、多くの場合手強いものにみえる。実際、制作を始めると紙面上で考えていた子どもたちは頭を自らで切り換える作業をしなければならない。制作とはその困難さの体験ともいえる。子どもたちは、木に加工をくわえることによって表れるいろいろな側面について、つくりたい物が具体的に形になっていくにしたがって一つ一つ体験していく。3年生の男の子がかぶと虫を作りたくて厚み2cmの角材の4角を鋸で切り、やすりをかけて丸くしようと試みている。手のちからや今までの経験から、切ったりやすりをかける作業も簡単なものではない。しかし、彼の中には、かぶと虫の姿がはっきりとイメージされ、それに向かってまっしぐらである。木はやすりがかけられれば、かけられるほど、形に柔らかさを与え、その子どもが丸いと感じるまで、その表情を変えることができる素材である。子どもがどこで、やすりをかけるのをやめるかは、子ども自身もっている作りたい対象物への思いによる。その思いそのものが顕著に表れる素材が、まさに〈木〉である。技巧の上手・下手よりも、より多く手が木に触り、握られ、道具によって、変化させられることによって、木の表面は表情をもち、客観的な形の正確さは、もはや最小限のものでよくなってしまふ。子どものもつイメージと木そのものに影響されて子どもが見立てるものごとを、制作物が共有したときに、見る者がある感情をもって受け止めることができる物になっていく。子どもは、ひとつの物を工夫しながら作ることの中で、木のいろいろな側面に会うことができる。それは、次にいろいろな種類の木を知るために図鑑を見るとき、単なる頭で覚える学習ではなく、実感として残った体験を通した手と眼でみることになるのである。





#### 《一本の樹》櫟

樹名： 櫟（けやき）

樹齢： 200年

高さ： 約20m

幹の太さ：約290cm

樹が生きていた場所：東京都渋谷区東

#### 《一本の樹》プロジェクトについて

一本の櫟をめぐる、昨年の秋から、一つの動きが始まった。人間の一方的な理由で、やむをえず切られることになった樹齢200年の櫟を、切った後をどうにかして生かしたいという動きである。口込みで、切られた木で何かを作りたい、やってみたいといって集まった人は約150人。年齢や職業を問わず、全国から参加した。櫟でテーブルを作ったり、皮を染めてセーターを編むなど思い思いの目的をもって、櫟を再生させようと試みている。数年後には、その報告をまとめ、《一本の樹》の本を出す予定である。

#### 《一本の樹》けやきと造形スタジオの子どもたち

大都会東京のど真中に樹齢200年の櫟が生きていた。その櫟と共に、何人の人々が四季折々の葉っぱの変化を見たことだろう。人の目には、樹の成長は、日々確認されないものである。しかし、周りの環境が急速に変化していったにもかかわらず、一本の樹が自然に従った時の流れを刻んでいたのだ。当然あるべきものが何も語らずその場にいるときは、その存在すら忘れてしまうのに、それがなくなろうとするとき、あわただしく振り向く人間たち…。そんな勝手な人間の行動に、200歳を雄に越す大樹〈櫟〉は何を思っているのだろうか。空気を美しくし、恵みをもたらす最も身近な存在であったはずの木が、その思恵を日常生活の中で直接受けないことを理由に目も止められず、あげくのはては、切り揃えられた角材たちに、木という名詞を奪われた。感情移入はたやすいことだ。憂い嘆くのもまたたやすい。

木は、古来日本人と深いかわりがあるせいだろうか。木をみているだけで、思いを深め、その感触に暖かさを感じてしまう。しかし、今の子どもたちが大人になった時、同じような思いを木に対してもつのだろうか。全くわからない。なぜなら、

すでに、子どもたちが、都会の中で、自然の木に接することは、殆どないからだ。私たち大人がやらなければならないことは、子どもたちに木の存在を知らせることであろう。知らせることは、文字や画像だけではなく、子どもたちに木に触らせ、持たせる、あるいは、それを握らせることである。

子どもたちに、造形素材としての木というより、むしろ、木のもつ様々な顔を体験させることを目的に1988年から行っている素材との出会い展「木と造形」の当初の目的を伝えるものとして、《一本の樹》は、本当によい機会だと思っている。こどもの城の造形スタジオにはたくさん子どもたちがやってくる。現在のあわただしい時間の中で、子どもの持ち時間もそう多くないことを私たちは開館5年目を迎えて実感している。《一本の樹》の櫟からは、時間のない子どもも参加できるように、より多くの子どもたちのために、より多くの素材になりうる葉っぱと柴をいただくことにした。子どもたちが作った作品はギャラリーワークショップで展示し、参加できなかった子どもたちにそれらの作品を見ることを通じて、樹を体験してもらい、多くの子どもたちの木の体験の輪を拡げたいと願っている。

ギャラリーには、櫟で作られた「大きな笛」も展示されている。《一本の樹》が伐採される時に「大きな笛をつくりたい」と現場に参加していた直川礼緒氏に、造形スタジオで制作していただくようお願いした。2mもある櫟の枝が笛になるなんて、思っただけでも楽しくなる。その過程を少しでも多くの子どもたちに見てもらいたい。制作中、造形スタジオに遊びにきた子どもたちが、直川氏のノミを振るう姿を見て、気軽に声をかける。一緒にきたお父さんが興味深げに見入っている。一本の樹の櫟は、そんな自然な出会いをもたらしてくれた。

ギャラリーでは、妖精の吹く「大きな笛」から《自然の音》が響いている。

大きな笛をつくりたい——切り倒されてしまう古い樺の樹を何人も人が分け合い、何でもいいから何か作ってみる…というプロジェクト「一本の樹」に誘われたとき、そう思った。長さ2mぐらい、人間の背丈を越える大きな笛。なぜ「大きな」笛だったのかはいまでもよく分からない。もとの樺の樹が、恵比寿の空を覆うほど大きかったからだろうか。とにかく人間の勝手な——そして「いたしかたのない」事情で切られてしまう樺を自分なりに再生させるには、「大きな笛」しか思い浮かばなかった。

そして樺の切られた日、手にしたのは20mの高さのあった樺の先端に近い部分、空の中でいつも風の音を感じていた所だ。この枝を生かすにはどんな笛にしたらいいだろう？

一言で「笛」といってもいろいろな種類がある。縦笛や横笛の様に空気を直接振動させるもの、クラリネットやチャルメラの様なりードのある笛、唇を振動させる唎吹類、そして草笛…。やはり「笛」という筒に囲まれた、その長さの空洞＝気柱そのものを直接振動させる、縦笛・横笛タイプの笛がふさわしいだろう。今まで樺の樹が外で感じていた「空」と「風」とを自らの中にとり込み、人間にもその音を伝えてくれるように。人間が「風」にとってかわれるとは思ってもよらないが、「風」を送り出すフイゴ位にはなれるだろう。

この笛がリコーダー式の吹口を必要とした理由は、自分でもよくわからない。横笛の様に、音が出るようになるまでの段階で笛の方で人間に技術を要求する吹口だと、音が出たあとのことを考えるのが大変になる…というのが一つの大きな理由であることは確かだが。

さて、いざ枝の中に空洞をつくるとなって、いきなり考え込まされた。どうやって長さ2mもある枝の中をくりぬいたらいいのだろうか。白蟻に喰わせる、ビーバーを飼いならす、こびとに頼む…等いろいろと考えてはみたが、どれも実現の可能性が低い。結局、縦に2つに割り、ノミで彫ることにした。

木を彫るということは、私にとっては全く新しいことだった。今まで作ってきた音の出る作品は、多くの場合素材の組み合わせによるものだったから。自分は木を彫っているのだろうか、それとも空洞を彫っているのだろうか等と思いながら、馴れない手つきでノミをふるって行く。空洞づくりの件に限らず、次から次へと起こる問題点に対処していく制作となったが、樺自身の発する不思議な力にも支えられ、とても楽しい作業となった。

最後に、こどもの城造形スタジオと、制作中に遊びにきて「何つくってるの？」ときいてくれた子どもたちに感謝の意を表します。

直川礼緒

